
アンチクローン

香芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンチクローン

【Nコード】

N1307M

【作者名】

香芽

【あらすじ】

出会わずもなかつた自分のクローンに出会った。

近未来、ヒトクローンの研究がこっそりと始まった世界の物語。

紺（前書き）

連載のかたちをとっていますが、一話が対になった短編小説です。非常に短く、ハッピーエンドとは言えないものでありますが、もしよろしければどうぞ。

紺

握った手は小さくて、小さすぎて、俺は途方に暮れる。

友達と呼べるかどうか、それすら微妙な関係のその人がおれに残したものは、この小さな掌と、あの日の別れの名残。

アンチクローン

そいつの存在自体を俺が初めて知ったのは小学生くらいのときだったけれど、実際に顔を見たのは高校の入学式が初めてだった。

高校の入学式の、新入生代表。やたらに張り切ったようにでかい花瓶の隣で、真新しい制服に身を包み流暢にスピーチをする顔を見て、俺は出会うつもりもなかったやつに出会ってしまったことを悟った。

色素の薄い茶色い髪に濃い茶の瞳、白い肌。口元はいつだって優しくカーブを描いていた。そんな優しげな風貌とふわりとした笑み、知的なところ、意外と運動は得意なところ、つまりは俺とは大違いに女子から大人気だった訳だけど、そいつの顔はどうしたって俺にそっくりだった。

俺はいつも黒ぶちの眼鏡をかけていたし、そいつと違って色素が薄いわけじゃなかったから、お互い以外に気がつく奴はいなかったけれど。

兎にも角にも、それが俺のクローンであるそいつ、桑原漣との初めての出会いだった。

人クローンの研究は当時、大っぴらではないが漸く開始されたばかりだった。

当時、というのは俺が生まれた当時という意味だ。

そして、俺はまだ母親の胎内にいたときからその遺伝子を採用さ

れ、クローンのオリジナルとして使用された。

そしてたった8カ月の年の差のクローンと、こっさり自分は比較され続けていたらしい。体型や、免疫、体力や頭の良さ。それ以外にも色々。今となっては俺が知るべくもない色々なこと。

俺がそのことを知ったのは、高校も三年目に入ったところであっただけ。

高校三年まで、俺は漣となんの接点もなかった。だから、様子を探ってはいたけれど、話しかけたことはなかった。自分から話しかけようという気もあまりなかった。

漣の周りにはいつだって人がたくさんいたし、漣のうわさは黙ってたって耳に入ってきた。

「漣君って格好いいよね」だとか。

「C組の桑原ってどこの大学入るんだろな？あいつってめっちゃ頭いいんだろ」だとか。

他にも良い噂は限りなく多く、優秀なことは分かっていたから、俺は劣等感でいっぱいだったのだ。

同じ遺伝子を持つてるくせに、人気者でなんでもできる漣が羨ましかった。俺はいつだって自分は自分と思っ生きてきたから、こんなドロドロした気持ち悪い思いとははつきり言っ無縁で、自分の汚さが初めて分かって、正直辛かった。

おかげで折角理科系の学習に力をいれているその高校に入ったというのに、生物部での研究もあまり上手くはいっていなかった。

初めて話したのは、放課後の生物室だった。

俺は何をするでもなく、一人で部活で飼っていたハムスターをじっと見ているところだった。ぶつちゃけハムスターのキク君にぶつぶつしゃべりかけてたから怪しい奴だったと思う。俺は当時受験ストレスもあって絶対にどこか吹っ飛んでいたに違いない。

生物科の人の良い教師に質問でもあったのか、そいつは俺のテリ

トリーに易々と侵入してきた。そして、先生がいなことが分かる
と、他の奴にするようなあの柔らかい笑みで俺に話しかけてきた。

「紺君、だよな？」

まさか話しかけてくるとも思っていないところに、名前まで呼ばれ
て俺は驚いた。

いや、名前くらい知っているだろうと思っていたけれど。

「そーだけど」

「俺さ、紺君とずっと話したかったんだ」

そう言っつても嬉しそうに、柔らかく笑った。

目尻がふわりと下がって、自分と同じ顔だとは思えないほど綺麗
にそいつは笑った。それを見て、どうしてこいつがあんなにも人に
好かれるのかが分かった気がした。

そして、俺もこいつが嫌いなわけではないのだと思った。

それから、そんな風に放課後の生物室で漣と話すことは何回かあ
った。

本当に他愛のないことばかり話した。少しだけクローンについて
の話もしたけれど、大抵はどうでもいい話ばかりだ。漣は俺の研究
について聞いたが、俺は漣が友達のことを話すのを聞いた。
漣は何が楽しいのか話しながらしょっちゅう俺の眼鏡をかけて遊ん
だ。

でも、それだけの仲だ。メアドも交換しない。ただ、そこにいる
ときだけ話す関係。

そして、何度か話すうちに同じ遺伝子を持っているのに、とかは
もう思わなくなっていた。そう思うには、俺と漣はあんまりにも違
ったから。それに漣が誰よりも努力しているのもうっすら気づいて
しまい、嫉妬も少しだけ薄れていった。

そんな日々も過ぎ、二学期の終わり、これ以降授業はなくなるし、
三年だった俺たちは自由登校になるから、もう話すこともないんだ

ろくなと思いくそ寒いのに生物室に行ってみたら、案の定漣がいた。生物室の少し高めの使いづらい椅子に腰かけて、ハムスターをじっと見ていた。丁度最初に話したとき俺がそうしていたように。

「漣？」

話しかけると、漣はいつも通りにふわりと笑った。

そしていつもと同じように、他愛のない、誰が相手でもいいようなおしゃべりをした。漣はいつもと同じように笑ったし、俺はいつもと同じようにぼそぼそとしゃべった。二人とも、これでもう会うことはないのだと思っていたと思うけど、そんなことはどちらも言わなかったし、雰囲気さえ出さなかった。

ただ、いつもと違ったのは去り際だけ。

漣がふと言ったのだ。

「俺、ずっと紺君みたいになりたかったんだよね」

ぽつりと、でも確かにそう言った。

いつも話すような優しい声じゃなくて、本当に独り言みたいな、何も飾っていない声で。

「俺も、漣みたいになりたかったよ」

だから俺も、思わずぽつりと言った。

漣みたいに、色んな人に好かれたかったとは餓鬼みたいで言えなかったけど。

帰る間際、俺は眼鏡を外して漣に渡した。

「貰ってどうしろと？」

漣は笑って言った。だから俺は漣の真似をして笑って言った。

「好きだろ？その眼鏡。それに俺はお前みたいにはなれないからさ、せめて眼鏡外してみたの」

「ふうん」

「で、お前はそれ掛けて、俺の気分を味わえばいいよ。何がいいのかわからないけど」

「ありがと。大事にするかわかんないけど」

「大事にしなくていいよ。じゃあ」

「ばいばい」

そしてそれだけ言って、いつも通りに別れた。

それが、漣と話した最後の記憶だった。

漣の子供を連れてきたのは、その子どものも母親の妹だった。

その人が言うには、漣は病気で死んだらしい。クローンは普通の人間よりもずっとずっと脆いことを考えれば、まだ二十代前半という若さでも納得できないことはない。そう、考えれば分かることなのだ。クローンはまだ、完璧じゃない。

子供の母親は、残念ながら今、子供の世話をみれるような精神状態ではないそうだ。まあ、だからこそ俺にお鉢が回ってきたのだが…。

漣のことは嫌いじゃない。嫌いじゃないからこそ、俺はクローンが嫌いになった。

その脆さが、嫌いだ。

子供と一緒に、あのと時の眼鏡が渡された。フレームには《anti-clone》と彫ってあった。何故か泣きそうになった。漣とは、友達ですらなかったのに。

なんで漣は死ななくちゃいけないかったんだろうか。

人の勝手に作り出されて、人が作ったから故の脆さで死ぬ。それは非常に論理的だけど、不条理に思えた。

でも、一度生まれた技術は捨て去られることはない。

だったら俺が、脆くないクローンを、完璧なクローンを作ってみせる。そう思った。

そして遠くない未来、この世の中には紺が構想した《人形》とい

う存在が作り出されることとなる。

それは、そう遠くない未来。

漣

さざなみという意味の《漣》という名前を与えられた。

こつそりと生まれ、弱々しく揺れて、そして消える。そういう意味の名前だった。

長く生きることなんて想定されていない。父も、母も、いない。

そんな俺に与えられた名前。

でも悪くない。

こつそりだとしても生を受けて、弱々しくもこの声で空気を揺らし、誰かに伝えられる。そして何より、何も残さずに消えるわけじゃない。

アンチクローン

俺は別に実験体として生まれたことが嫌だった訳じゃなかった。

父も母も与えられなかったけれど、別に不満はなかった。育ててくれた教授は優しくかったし、愛情に飢えていたわけでは決してなかった。

クローンとして生まれたというだけで、特に他の子供と違うところがあるわけじゃあない。少し体は弱かったし、検査も多かったけれど、それだけだ。

ただ一つだけ、少しだけ嫌だったことがあるとすれば、俺のオリジナルといつだって比較されることだったけれど、悔しかったから、勉強も運動も力を抜いたことはなかった。だからいつだってたくさん褒められたし、褒められて笑ったら、教授も優しく笑った。だから、何の不満もなかったし、オリジナルに対してもちよつとしたライバル意識があるくらいで、大した興味もなかった。

中学生くらいで、初めて本人、紺君を見るまでは…。

紺君を初めて見たのは、教授に連れられて中学生の研究発表会を見に行ったときだった。教授は将来の有望株を探すんだと嬉しそうだった。当時からどう考えたって文系だった俺は少し居辛くなって、別行動をした。

そしてそこで偶然発見してしまったのだ。スクリーンの前に立って、自分の研究について発表する彼を。

背筋をまっすぐ伸ばして、堂々と前を見て話すその人は、髪は真っ黒だし、瞳の色も黒くて、意志が強そうに見えた。黒いふち眼鏡をかけてへの字口で、ちよっとも笑わない。だけれど、どう見たって俺と同じ顔だった。

そして話の内容もすごく素敵だった。

俺は勉強も運動も負ける気はしなかったけれど、紺君みたいに自分から何かを考えて、研究することができるようにには思えなかった。純粹に憧れた。

健康的に伸びた背に。真っ直ぐに前を見る黒い眼に。自分で考えて何かをできることに。それを見て本当は教授は、俺がそういう子供に育って欲しいんだと思ったから。

だから高校は無理を言って、紺君と同じところに入った。紺君は公立の中高一貫校に入っていたから、どこに進学するかは言わずもがなだったし。

紺君を近くで見て、紺君みたいになりたかった。

だけど結局紺君と話すことができたのは三年に上がってからだった。

たまたま通りかかった生物実験室に、紺君がひとりで座っているのを見つけたのだ。

斜めに傾いた日が入りこんだ実験室の片隅で、座り辛そうな、机に対して高すぎる椅子に座って、その長い脚を持て余しながら、ハムスターのゲージをじいっと見ていた。

「キク君、聞けよー」

と何やらぶつぶつ言っていて、ちょっとばかり心配になったけれど、大きく一つ深呼吸すると、如何にも先生を探しているんです、という風に教室内をぶらついてみた。

そして気合いを入れるためにぎゅっとこぶしを握った。

「紺君、だよな？」

紺君は目をまんまるくしてこっちを見た。いきなり下の名前で呼んだのはまずかったかな…。

「そーだけど」

でもそう返してくれた声が、思ったより優しく、俺は安心した。

「俺さ、紺君とずっと話したかったんだ」

それから俺は、何回か生物室に足を運んで、紺君と話した。

話しながら紺君から眼鏡を取って、付けてみるのが好きだった。

レンズ越しに見る世界は紺君が見ている世界だと思つと、眼鏡をかければ紺君にちょっとでも近づける気がした。

でも、そんなことを数回繰り返すうちに気がついた。

俺はそんなことしても、全然紺君には近づけない。

でも、そんなこと関係なく、俺は紺君のこと好きなこと。眼鏡を外して、ちよつとだけ笑った顔が俺にそっくりで、まるで兄みたいだと思つたこと。

だから、俺はいつの間にか紺君のそんな顔が見たくて、眼鏡で遊ぶようになった。

父も、母も、俺には与えられなかった。そのことが初めて少しだけ寂しく思えた。《兄》を得て初めて気がついたのだ。

二学期の終わり、これで紺君に会えるのは最後なんだろうなと思しながら、生物室に行った。

紺君はいなかったけれど、なんとなく諦められなくて、初めて会ったとき紺君がそうしていたみたいに、椅子に座ってハムスターのゲージを見つめてみた。紺君よりも身長が10センチ程低い俺には

脚を持って余すことなんてなかったけれど、なんとなくくすぐりたい。

その後、願いが通じたのが紺君はやって来て、いつも通りに話した。これが最後なんて風じゃなくて、まるでこれからこんな関係が続くみたいに。

実際、連絡先を聞けばそれも可能だったんだと思う。だけど、こういう関係だからこそ気持ちいいものだったのだと思えば、それもなんとなくできなかった。

だけど、最後にぽつりと、言ってしまった。言っつもりもなかったのに。

「俺、ずっと紺君みたいになりたかったんだよね」

そしたら、紺君もぼつりと言った。

「俺も、漣みたいになりたかったよ」

その一言がちよつとだけ、嬉しかった。

帰る間際、紺君は眼鏡をくれた。

「貰ってどうしろと？」

俺は笑って言ったら、紺君はまた俺に似た顔で笑った。

「好きだろ？その眼鏡。それに俺はお前みたいにはなれないからさ、せめて眼鏡外してみたの」

「ふうん」

「で、お前はそれ掛けて、俺の気分を味わえばいいよ。何がいいのか分からないけど」

本当は眼鏡を外した紺君が好きなのだけど、そんなことは言わない。それに眼鏡は俺が貰ってしまったから、いつだって紺君は俺そっくりな顔で笑うのだと思うと嬉しかった。

「ありがとう。大事にするか分からないけど」

「大事にしなくていいよ。じゃあ」

「ばいばい」

そしてそれだけ言って別れた。

それが紺君と話した最後の記憶。

俺は今、病院のベッドに横たわっている。

窓から注ぐ日の光が、俺の今の気分にはそぐわないくらい明るくて気持ちが悪かった。消毒液の独特の匂いも、もう慣れてしまって気にならない。

明日だろうか、明後日だろうか、それとも一週間後だろうか。そんなことは分からないけれど、多分もう長くはないのだろう。

《漣》という名前を与えられて、長く生きられないだろうとは知っていたのに、今さら死にたくないと思う。

死にたくない。まだ、死にたくない。

クローンなんて、嫌いだ。嫌い。

初めてそう思った。

彼女は俺が死にかけて、実はクローンだったんだと打ち明ければ、すごい悲しそうな顔をして泣きだした。クローンの子なんて産ませると、泣いた。私をおいていくなと、泣いた。

俺は自分がクローンだって認識が甘かったんだ。

教授に子供を産むとき言われたのに全然わかっていなかった。

きつと子供と彼女を残して死ぬこと、子供は俺と同じで普通の人間よりも脆いかもしれないこと。そんな認識がきつと甘かった。

ごめんなさい。ごめんなさい。

でも、生まれてきて後悔はしていない。

俺のせいで人生が狂ってしまった彼女と子供には悪いけれど。

ごめんなさい。俺は生まれてきて後悔していない。

子供は紺君に預けて欲しいと頼んだ。彼女ではきつと育てられないだろうし、クローンの子なんて彼女の親戚には頼めないし、俺には家族がないから。

だから俺の唯一の兄代わりに。

眼鏡を返したのはきつときまぐれ。俺の子供にかけて欲しい。そ

れで紺君に俺のこと思い出して欲しかった。もう他に、俺のことを思い出して笑ってくれる人はいないだろうから。他の、俺を思い出してくれるような人は、多分俺を思い出して笑ってはくれないから。

だから。

ごめんなさい。

ありがとう。

さようなら。

唯一、俺の家族だった人。

漣（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます。

初めての投稿ということですが、少しばかり緊張してしまいました。こんな悲しげな話ではありませんが、楽しく読んでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307m/>

アンチクローン

2010年10月8日14時35分発行